

黄泉比良坂  
よもつひらまが

深い水の底。冷たくも息苦しくもない。今は夜で、空には大きな満月が見える。この感覚も、そう昔のことでもないのに不思議と懐かしさを感じる。鼓膜を圧迫する水の重さも、搔いた水が肌を撫でる感触も無い。視界を閉ざせば、もう上も下も判らない。

前回は全身痛い所しなくて、逆に何が痛いのか判らなくなっていたが、今回はハッキリと意識はある。前回は喉も肺も焼かれていて息ができなかったが、今回は元から呼吸していない。前回は目玉を潰されていたのか焼かれた瞼まぶたが焼け着いていたのか、どちらだったか判らないが何も見えなかった。今回は自分で視界を閉じた。

いったい、ここは何処だろうね？ 五感すべてを閉じてしまったから、もはや自分が本当に水底みづそこに沈んでいるのかすら判らないよね。今何時？ そうね大体ね。正直分からん。

真夜中に入水したのは覚えていた月が見えていたけれど、この樹海ではいつも月は見えていないし、視界を閉じる前から、水面の煌めきの他に動くものは無かった。泉の透明度が高過ぎて光のカーテン的なものも無かった。魚なんて勿論居ない。

そろそろ意識も閉じようかね。七割くらいの確率で行けると予想したが、どうだかね。遣ってみたいことには分からんね。向かう先は黄泉の国。



「おいでやす、黄泉の国ーっ！」

死後世の重暗いイメージに似付かわしくない、非常で、明けらかな女性の声でした。

目を開けると月は無く、水も無い。意識を喪失している間は時間も感じない。分からないのではなく『感じない』ので、これは主観的には一瞬の出来事である。

硫黄とニンニクが混ざったような臭いと共に、眼前には、燐光でぼうっ…と昏く照らされ黄色くくすんだ岩壁と、人の形をしていると僅かに判る影が確認できるくらいで、暗闇に目が慣れていてもぼんやりとしか分からない。本当にここが黄泉の国なのかは正直分からないが、まあ元居た場所ではないのだろう。少なくとも。

「こんばんは」

「ここは何処ですか」

「黄泉の国です」

「地獄とか魔界ではなく？」

「黄泉の国です」

「根の「黄泉の国です」

……黄泉の国らしい。

時差は分からないが、早いに越したことはない。早々と調査しちまおうと歩き出すと『ちょっと待て、何処へ行く』と呼び止められる。何処へ？ と問われても、前回の記憶は殆ど無いため「特に決めてません」と答える他ない。

「名前は？」

「日本武尊彦（やまとたけるひこ）と申します」

「何故嘘を吐くのですか」

「申し訳ない。お茶目を沸かしました。真名を早美と申します」

「何故嘘を吐くのですか」

「じゃあ、颯（はやて）にします」

「舌を抜きますよ？」

「貴女は嘘吐きですね。ここは地獄ではないと言ったのに『舌を抜く』だなんて、やはり悪魔か獄卒ですね？ そんな成りをして、油断させて新参の魂を食うつもりだったのですよね？ 今更ハニートラップに惑わされる私ではない」

そうスッキリ言い終えると、黒髪・黒肌・黒目・黒衣と全身真っ黒の少女に殴られた。

……舌を抜かなかったね……？ やはり嘘吐きじゃないか。

「もういい……何をしに来た」

死人に死んだ経緯を訊ねず、死んだ目的を聞くとは変わった方ですね。

特に目的は無く、謂わば調査が目的です。観光案内所はどちらでしようか。もしかしてパスポートが必要な国でしたか？ 文献にはそんなことは書かれていなかったと思うけどなあ、責任者は何処だ？

「……そう、責任者ね……いいよ。合わせてやる。けれどその前に——」

強引に引き寄せられ突然口を吸われた。どういうことか。

……意味が分からない。

「ん……っ?!」

最近は視覚と聴覚以外ほぼ断たれた状態だったため、その蕩けるような舌と柔らかな唇の感触に吃驚し、熟れ過ぎた果実のような微かな腐臭と、少女の甘い香りが混ざった芳香が私の鼻腔を悦ばせ、全身が弛緩してゆく。

突然のことに驚きはしたが、私とて初心モノというわけではない。少女の接吻くらいで今更狼狽える私ではない……が、しかしそれでも、どうしても口内の淫密な少女の舌遣いに意識を奪われてしまう。まさに魂を抜かれるような舌技に、身体の支えを維持すること

ができない。舌と舌が結ばれるたびに脱力し身を寄せる私を少女に抱き留められ、口淫を繰り返される。

柔らかな少女の肉の感触に包まれて下腹部の隆起が起こった。この感覚も随分久しぶりッ「痛っ……!!」

しばらく、内から外から全身を性的に撫でらる快感に浸っていると、口内に激痛と鉄の臭いが広がった。少女は肉を保持するのを止め、肉である私は地に自由落下し、膝を激しく打ち付けた。とても痛い。

「はあ…っ♡ 責任者は神だから禊をしないとね……？」と、モグモグと咀嚼し、私の舌を味わい嚙下した。えんか彼女の血濡れた笑みは禍々しく、自分が何をしに来たのか忘れかけるほどに美しい。

忘れてはいない。

忘れてはいないが、もう少し色が抜けて小麦色だったら、どうなっていたか分からないかもしれない。初めよりは見えるが、ぶっちゃけ暗すぎて表情が良く見えんのである。

現状で判るのは……そうだな、声色は可愛いとも綺麗とも謂える。

なんと言えばよいか形容し難いのだが、とても耳に心地よい声をしている。気絶してはたはずの私を、手も触れずにただの一声で呼び起こす引力を持つ声だ。

つまり、最初に好きになったのは声。(他に知覚可能なものが無いから)

耳を塞いでも頭の中に鈴の音の様に響かせ、人の意識を捕らえる。

『声・言葉のみで人を唆し操る』と言い換えれば、悪魔の囁き<sup>ささやかし</sup>が連想される。

やはり地獄の悪魔か。

私に比較対象となる悪魔の知り合いはいないが、あの達者な運舌から考えるに淫魔というやつなのかもしれない。

ところで、何故舌を嘔み千切ったのか。

嘔吐き呼びわりがそんなに嫌だったのか……？

口ん中血まみれ……出血止まらないから地面に垂れ流し……

血液が拍動に合わせて心臓から輸送されるたびに、ドクドクジクジクして痛い……

地獄では無限に責め苦を味わわせるために、物理的損傷はどんなに壊滅的でも再生すると

聞くけれど、黄泉国ではどうなのかな？<sup>よもつくに</sup>

……これ治らないと、もし黄泉大神に会ったとしても如何しようもないのでは……？それだけならまだ良いが、向こうに戻っても発話できないとかだと困るよなあ。

そもそも、流血を伴う禊ってなんだ。禊つうか身削ぎじゃねえか。

洒落のつもりかよ、寒いわ。

「随分落ち着いているね？」

まあ本来私は無口だし、数カ月や半年一言も発さず生活していたこともあるし、死後に声を奪われたくらいで狼狽えるほど重視してはいない。味覚は舌を取られる前から失っていた。

「喰われたこと自体についてはコメントすらないのか……つまらん」

おや？ さすが悪魔。物言わずとも会話できるなら、ここでは問題無いな。

さあ、悪魔よ。私を神の御許へ誘うがよい。

こう言うと、まるで天使か何かのようで面白いな。面白<sup>ぶら</sup>いけど。フフフ。

「……舌一枚抜いたくらいで終わりなわけなからう」

どうせ地獄巡りなんでしょ、分かってるわ。

時間が惜しい。サクサク進めてくれ。

「ふうん、地獄の辛苦を舐めてるのかな？ 舌も無いのに」

儀礼的なものであって、本当の地獄ではないのだから恐れるほどのことはない。

地獄の本当に恐ろしいところは、痛いとか苦しいとか神経に依存したことではなく苦痛に終わりが無いことだ。

まあ、限りなく長いというだけで終わりはあるのだけれど。

「ここは黄泉の国であって、本当の地獄ではないから、失ったものは戻らないけど本当に平気かな？」

まじかー。じゃあ、現世に戻ったとしても舌の神経死んでる感じ？ むしろ壊死してる？

じゃあ、新しいやつ用意しないとな。

「じゃああって……」

別に難しいことは言っていないつもりだが、要約、取り戻せないなら新しく作ればいいじゃない？

「魂が欠けているんだから、たとえ移植できたとしても動かないよ」

そうなのか。まあ、それなら舌無しで発話できるようにパーツ増設すればいいか。

むしろ、技術的にはその方が簡単だけど。

「ロボットかよ」

そうだよ。

まあ、そんなことはいいいじゃない。

少女に導かれるまま、岩と砂の暗黒の道をザリザリと、カツンコワンと足音を反響させながら、たまに膝下程度の高さの岩を降りながら黙して歩く。

……初めの場所でもそうだったが何の臭いだ？

黄泉の国だけに火山性のガスでも充滿しているのか、とても臭い。

本能的にも知識的にも、ここは危険だと神経がピンピンに張っている。

火花でも咲こうものなら大爆発しそうだし、二酸化炭素や一酸化炭素ガス溜まりに踏み入れ昏倒してそのまま死にそうだし、硫化水素とか毒ガスでも普通に死にそう。

手を伸ばせば容易に届く程度に天井は低く、両手の壁もぎりぎり同時に触れない程度の幅しかない。仄かに熱を持った土壁は柔らかい……

……虎穴に入らざれば虎子を得ず……何と言っても、死の国、死を齎すための国。

安全は無いと覚悟はしていたが、まだまだ想定が甘かったようだ。クニというから、もう少し拓けた地下空間を想像していたが、まるつきり地下洞窟である。

それも整備なんて当然されていない情弱な洞穴。どうけつ

頭上には、いったい何万何億トンあるのかも分からない土と岩が控えていて、常に崩落による圧死と身体の粉碎の危険が付き纏っている。視界がほとんど無いに等しく、もし足を取られ、縦穴にでも落ちようものならまず助からない。そういうものは大抵、地下水脈や地殻運動等によって、何十・何百メートルと掘り抜かれている。底が見えないために覗き込むことができるが、高層ビルの頂上に命綱無しで立っているようなものであり、洞窟とは地下でありながら遥か天空でもあるのだ。

日本神話を史実として考察した文献では、黄泉国の実在候補地として幾つかが挙げられている。

- ・ 火神を生み焼死した女神が眠ると古事記に記述される ひばやま 比婆山”
- ・ 紀伊国熊野の有馬村に葬りまつると日本書紀に記述される いわや 花の窟”
- ・ 後に三貴神を生んだ男神が、黄泉から逃げ帰るときに大岩で塞いだ場所と伝承される いやしんじや 揖夜神社、いふやざか 伊賦夜坂”

・出雲国風土記に記述される『猪目洞窟』若しくは『なづきじま脳島洞窟』

特に私が気に掛かっているのが猪目と脳島の洞窟で、地学的にこの辺りの場所は元は海の底であり、海底火山活動によって生成された今から凡そ1700万年前の牛切層の岩盤が、長い年月をかけて地表に至った海蝕洞窟だそうだ。

歴史にも宗教にも特に興味の無い私が、何故そんなことを知っているかというところ、単純明瞭『調べたから』。

むしろ入水しようというのに、自らの逝く先を事前に調べないわけがなからうよ。

海と死の国で連想するものと謂えば、沖つ国。海原だ。

沖つ国も、日本神話で死の国を示す言葉の一つであり、神話を一種の史実と仮定したとき、海底に在った死の国が火山活動で地上に顔を出したと解釈すれば、死の国に複数の名称が存在する辻褄を合わせることができる。また、猪目洞窟発見時の話に『昭和23年に漁船の船置所を利用するために堆積土を除去して発見』とある。

『死の国に続く』と伝承される洞窟が土塊つちくれで塞がれていた』のである。

まあ、私がテキトーに因縁付けているだけだが。

伝承では『宇賀郷の北の海濱に磯あり、その磯をなつきあいそ腦磯と名づくる。磯の西に窟戸いはとあり。夢にこの磯の窟の辺に至れば、必ず死ぬ。故、俗人古より今に至るまで、黄泉の坂、黄泉の穴と名づくるなり』とある。

つまり『夢でこの場所に来たものは必ず死ぬ。故に古くからこの穴を黄泉の入り口と伝えられている』となり、旧い地名や地理関係から、ここに書かれる黄泉の穴とは猪目ではなく脳島ではないだろうか？ など諸説ある。

夢のある、夢の噺。

夢でしかないのかもしれないが、夢では済まない夢の噺。

眠るということは意識を手放すことであり、永眠と謂うように、眠ったまま永遠に目覚めないものもある。眠り、目覚めるということは『夜、天に命を返し 朝、再び天より命を授かることだ』と古代の人々に信じられていた。

夢は最も身近な異界なのである。

『夢で見たら死ぬのに、どうして伝承されるのか』という疑問はあるだろう。

これは答えは出ないが、日本神話では歩いて黄泉を出入りすることが可能なので、死んでから言い伝えたのかもしれないし、洞窟の前に知人が立っている夢を見た後、現実のその人も死んでいたという話が変わっていったのかもしれない。分からないが、私も黄泉と縁深い特別な泉の底で意識を断つことで泉下の客と相なった。

まあ、まず霊的存在としての黄泉の次元穴が在って、それが物的存在としての黄泉の穴が呪術的にリンクしていたと考えるのが良いかもしれない。揖夜神社付近の黄泉比良坂伝承地であるところの伊賦夜坂などは、何処が黄泉の入り口なのか全く分からないが、そういうことであれば、言い伝えられる入り口に象徴的な *object* が無くとも、異界への穴が複数存在していても量子学的想像で補完できなくもない。かもしれない。であるなら『黄泉の穴は黄泉へ続くというだけの穴であり、固有のものではない』ということなのか、はたまた『唯一にして固一のマクロな穴が、ミクロの現象である量子もつれの事象によって複数の場所に現れている』ということなのかちょっと興味が湧いてくる。また補足として、猪目洞窟内からは複数の人骨が発見されている。更に

「さっきから煩いぞ」

仕方ねえだろ。口ん中痛いし、今のところ足元はしっかりしてるけど何も見えないし、地下は時間の感覚が狂って何時間歩いたのかも分からないし、舌が無いから歌うこともできないうし、気を紛らわせようとすると必然こうなる。

「……ハア……ッ……」

ため息やめろ。

住人の御前にとっては日常でも、私にとっては辛うじて命綱が繋がっていかないかもしれない状態で、気絶した知らぬうちに地底深くに放り込まれていた様なものだぞ。出会い頭に舌を噛み千切られるし、対策くらいしておかないと並みの奴は気が狂うわ。

「予め調べておきながら、自らこの国に足を踏み入れたのであろう？ 既に正気とは言えんわ」

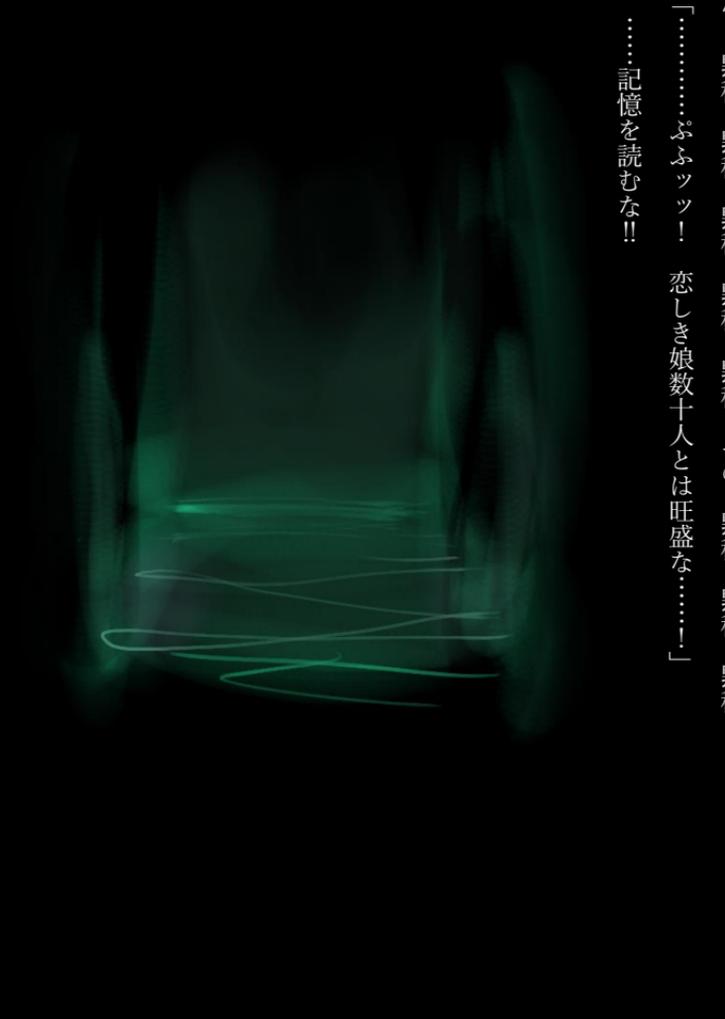
たとえ無駄死にだったとしても、大事の為なら止むを得ない。

「ほおう、大事とな？」

黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。

黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。岩魚。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。

黙秘。ラーメンマン。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。黙秘。おちんち



ん！ 黙秘。 黙秘。 黙秘。 黙秘。 黙秘。 その。 黙秘。 黙秘。 黙秘。  
「……………ふふッ！ 恋しき娘数十人とは旺盛な……………！」  
……………記憶を読むな！！

少し灯りのある場所に出た。

リンか何かが燃えているのか？ 通路の幅が二人並んで通れる程度に少し広がり、数メートル先が水没している。水面付近の壁が緑色に光を帯びていて、水は黄色く泥で濁り、目で測って水深は測れない。

灯りを得たかと思えば泥水で足元が判らないとかさあ……………

……………水没エリアを抜けたら抜けたで身体に着いた泥が燃え出すとか無いといいな……………

「こほん…良い想像力だね」

そういえば、何処に向かっているんですか？

「颯山」

なるほど針山か。やだなあ痛いの。

「そんな平気そうな風に装っても、本音はバレバレだよ」

今も出血に合わせてジクジク痛い、咬み千切られる瞬間が一番痛くて、あとは単なる傷口だから深刻な痛みじゃない。地味に悶絶するほど痛いけど、元々刃物を扱っていたから切傷や刺傷には割と慣れている。

……………それより出血で気持ち悪い……………副交感神経だったか？（正しくは血管迷走神経反

射) 確か血管を傷付けたりするとなるんだよな……ウシアブの餌にしようとして自分で血を抜いたり、カボチャ切ろうとしてザツクリやっちゃったときになったっけ……うっぷ……

あと噛まれる前のあれは結局なんだったのか……なにか意味があったのか？

「くすっ♪ もし舌が生えたら、またシてあげてもいいよ？♪」

……正直、性癖に合致するのでお願いしたいかもしれない。

「気持ち悪い」

うるせえ、痴女。そっちこそノリノリでやってたくせに。 嘯まないならしゃぶらせて

やっても良いぞ？ ……………魂のみ、もとい魂の身だからか？ 理性が上手く効かない。

「痴女とか、ひどいなあ……それに『しゃぶって下さい』だろう？ 女の身体欲しさに惨

めったらしく地面に頭擦り付け『私を貴女様の奴隷にしてください』と懇願するなら、な

お万と楽しませてやってもよいが……？」

正面から首に腕を回されて、耳や頭を繊細に撫でられ囁くように秘事に誘われる。

鮮血で紅を差した唇が眼前で艶めき、首筋に甘く吸いつかれる……良い匂いがする……

吐息が聞こえる……

…はあ…っ…うくっ……

考えないようにしても、あの舌や唇で包まれることを想像してしまう……！！

「そうだ御前は今、肉体の枷無き故、精魂尽くるまで何度でも精を吐き出すことができ  
る。ほれ、目の前に天国があるぞ？ なにもかも忘れ、私と終わり無き淫蕩いんどうの日々を過  
ごそうじゃあないか」

互いの存在を求めて濡れた身体を密着させ、衣服越しに伝わる体温と柔肌への期待に鼓  
動が早打つ。下腹部の膨らみに気付いてか、少女がニヤニヤと嗤って身体を押し付け、激  
しく劣情を掻き抉る滑らかな肌を擦り付けてくる……！！

っはあ……っく……や、め、……… あ、うつ……… ああ………快………もつと……

もう………いいんじゃないか……？ なにもかも忘れてしまえば………

そして、ここで彼女の手で果てることがきつと………

ここで終わってしまうことがきつと………

乃木園子の顔が脳裏に張られた暗幕上に瞬いたが、すぐに割り込むように少女の声に脳  
室を蹂躪され、掻き消え、失せてしまう。「ん……」

少女の首筋を唇でくすぶり、腰を捕まえて熱く張り詰めた下腹部に押し付ける。舌で味わえなくなつた分の快楽を…あれ以上の悦楽を…快感を…視界が痺れて何も考えられなくなるような淫楽を……！結合を……！融合を！

「さあ……言つてしまえ……『貴女に私のすべてを差し上げます』と」

……わたしの……わたしの……

「焦らさないでおくれ……私も欲しくて堪らないんだよ……」

しつとりと、再び口で口を塞がれる。

既に病みつきといつた風体で一心不乱に唇を食み体液を混ぜ合うが、前回とは状況が異なり脳を麻痺させるような興奮や快楽が訪れることはなく出口を失つた血液が止め処なく溢れ続け鼻へ喉へ奥へと逆流し、押し寄せる!!

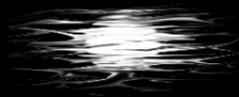
「ゴフツ!!」

息ができない……! くるしいっ……!! しぬ……っ! 離せ……!!

引き剥がそうとしても、彼女の身体は空間に固定されているかのようにピクリとも動かない。全く動かない。人外の力で磔にされている……! 視界がチカチカして、しろくなくなつて、肺がくるしくて もう…… いきが……くる……くる……い

「ゴボブっ?!」

唐突に苦しみから解放され目の景色が変わった。月が見える。



……どうも、ここは心地が良すぎて力を失くす。

私は無心で水の梯子はしごを掻いた。

「大丈夫!？」

ああ…… 現世に戻ったらしい。

いや……これも正確には現世ではないが、便宜上『現世』と呼ぶ。

「どうだった？」

説明しようとして言葉が出ないことに気付く。

……なるほど、この身体で発声できないということは肉体的・物理的なことじゃない。

『魂の欠損』というものが、何処まで影響が出るものかは分からないが、殆ど概念的に機能が奪われたと謂える。

「どうしたの……？」

……む？ 彼女は読心ができた筈だが……こちら側に来て読めなくなっていたのか？ それとも奪われたのは舌ではなく『会話』だったとか……？ 文字は……書けるみたいだ。

なら問題は無い。

【義体に不調が出ているけど、とりあえずは成功です。】

【けれど、まだ真つ暗な地下世界というくらいしか分かりません。】

「そっか…無理しないでね？」

【はこ】

手掛かりに成りそうなものは見付けたが、あの少女が本当に黄泉大神の元に案内してくれるとは限らない。……………しかし……………

怪我の功名？ セルフ血の池地獄に沈められた甲斐はあった。

少女が短気で助かった。

外から起こしてもらったことで帰還する予定だったが、あちらで気を断れば主体的に帰れるということが分かったのは大収穫と謂えよう。

あの少女は一体何者だったのだろうか？

最後、灯りがある場所で至近距離に顔を近付けられたお陰で、はつきりと見ることができた。滑らかで、とても美しい相貌をしていて、本来私は審美性が高い対象には、鑑賞眼が優先されてしまい性的に見ることが難しい性質なのだが、彼女には一目で正気を揺さぶる蠱惑的な何かがあった……………ような気がする。

何故だか分からないが、少女の姿を思い起こすことができない。

思い出そうと手を伸

ばしてもすり抜けて取っ掛かりが無く、連想した言葉たちが深くて昏い場所に落ちて行っ  
てしまう……まあ、思い出せないものは仕方ない。

一説に、黄泉醜女よもつしこめに表される醜という字は、黄泉に住まう醜い女のことではなく、灵力  
の強いもの。強靱なもの。途方もないもの。並々ならぬもの。を意味するのではないか？  
というのがあある。あの少女がそうなのだろうか？

今月中に、もう一度潜る機会があるが大丈夫だろうか……

懸念材料はまだある。

次回も同じ方法で潜るとして、今回初めに降りた場所から遣り直しになるのだろうか？  
そうなると現世との時差が気になるところだ。都合良くオートセーブ方式だったとして  
も、気絶したのは腰まで浸かる水路の下真ん中。

今回、少女の声が聞こえたと同時に覚醒したのだから、最悪向こうで目覚めず水路の底  
に沈んだまま溺死が有り得る。これまた都合良く少女が待ち構えていたとしても、あの  
泥水に沈んでいたら気付いてもらえないかもしれない。いや、もしかしたらあの暗黒地下  
世界で生活している彼女なら、不思議な力で発見してくれる可能性も無いとは言い切れない

いが、それは希望的観測に他ならない。そも、他力を当てにしている場所ではない。

また、スタート地点がランダムだったとしても……まあ、言っても如何しようもないことなんだが博打が過ぎる……：どういうわけか神奈さんの読心スキルが無くなっている助かった。こんなこと彼女たちに話すわけにはいかない。 どうにもならない死後のことなど知らない方が良い。

凍えて動かない身体。認知機能と共に失われる『自分はここに居る』という実感。

欠けていく自己と意識の混濁。閉じては二度と開かない瞼。

落ちてしまえば取り返しがつかぬと分かっているながら、抵抗空しくむな全てが沈んでゆく。

無に帰すことの恐怖など気付かず済むならその方が良い。

知ったところで。

気付いてしまったところで、実在があるなら怪我をするし老いもする。

生きているのなら神であろうと死ぬ。

故に古今東西、人間たちは死後の恐怖を忘れるために宗教の死生観を生み出し、目の前

の生に意識を逸らし続けた。人類を滅ぼさんと天使が降り注いだ西暦2015年のあの日も、人類は死ぬ覚悟など出来ていなかっただろう。

脱線したが、次に禊とやらが地獄の獄門をなぞるのであれば、遅かれ早かれ致死レベルの人体破壊が必ずあるということだ。これはさすがに回避したいところだが………あつ閃いた。うん。これなら全損でもとりあえず問題は無い。

\*

日が昇ったので、発話できない不便を解消するためにエンジンアの元を訪ねる。

本社は山頂に在り、天の梯かけはしだとか、天空の鳥居だとか、大層な名を付けられた長い長い石階段を登った先にある。

まあ確かに登ると空は広く地は遠く、無機的な建造物が気持ち悪く密集しているところから目を逸らせば、田んぼの美しい緑が敷かれていて、海と天地に挟まれた広大な空からの間の解放感と共に、風に撫でられる木々のざわめきと朝の山頂の肌寒さをほんのりと温め始める日光などが心地よかっただろう。

西暦の資料には、都会の夜景に対し『多量の電光が、まるで寶石箱の様だ』と賛美する記述があったのを覚えているが、私にはどうも分からない感覚だ。

アリや、ダニや、ウジが集っているのを見て『気持ち悪い』と人は言うのに、それは平気なのだろうか？

私は群がり蠢く蟲を観るのは好きだが、その逆ということなのだろうか。

しかし、儀式を必要としない部署まで山頂に配置するのはさすがに不便だよな。

疲労と無縁なこの身体でなければ通うのは正直面倒くさい。

職員は住み込みなのだろうか？

「んー、帰ったら何しよっか、楓ちゃん」

【私に案を求めたら「ベッドの下のラブドールごっこ」とかになりますよ、神奈さん】

「もー、意地悪だよー」

ぼっちに独り遊び以外を期待する方が間違いだと思うんですよ。精々テーブルゲーム？

「しょうがないなあ、もう……」

鳥居をくぐると仮面を着けた女性が出迎えてくれた。仮面の中心には木を象徴化したものが描かれている。

現在の私は声を発することができないので会釈だけを行い先を促す。

「こちらへどうぞ」

事務的でとても淡々とした口調の方だと思う。

彼らの中では少ないタイプだろう。

大まかに分けると、彼女のように声色に感情の乗らない至極事務的なタイプ。

宗教者として振る舞う仰々しいタイプ。

呪術と先進科学を扱い、ファンタジックなアーティファクトを実現させてしまう変態。

宗教道徳教育をその身に体現し、限りなく善良に振る舞うもの。

仮面を外してしまえば特異なところなどない、何処にでもいる雇われ従事者などに分

れているように思う。 いや知らんけど。

目的の部署の前に着くと、室内からキーボードを叩く音が聞こえる。

「ん。氏紙さん、お待ちしました」

技術主任の彼は、義体のことで私が連絡を取り合うことの多い人間の一人だ。

何か作業中だったようだが……

「ああ、気にしないで下さい。メンテのログを浚っていただけですから」

「では、後は宜しくお願いします」

「偶には一緒にどうですか？ この世界では、急ぐ仕事も少ないでしょ？」

「……では先日の定期報告に上がっていた『異界に召喚されて以降、使途不明瞭な経費申請が複数の部署で見られる』件の視察として同伴させていただきました」

「びっくりするほど堅い。 そんな無理に理由付けなくても……」

ゲームと言えばポータスステージのような状況とはいえ、人類存亡が掛かっている機関なのだからまあそら多少はね。と、パワハラおじさんを尻目に窓から作業場を眺める。

……私も仮面付きなので、あまり人のことは言えないが相変わらずの仮面集団だ。

確かにこの仮面の《三ツ葉花》ミツバハナシステムは画期的だし、非常に有用ではあるが……私と違って生身なのだから長時間仮面でいるのは鬱陶しかろう……作業の間くらい外せばよいのに。

二人の戯れが済んだようなので筆談にて用件を伝える。

「そうですね。とりあえず中、診ましょうか」

主任がそう言うのと、見た目鬼っ娘純白美少女の私の着物をはだけさせようと手を滑り込ませかけたところで付き添いの神官がセクハラおじさんの腕を掴み上げて制止にかかった

!!

「……何をしているんですか？」

『ぐああ』と、主任改めセクハラおじさんの大げさな低いうめき声が計器室内にこだまする。……わあ、その方向に指は曲がりませんよ、神官さん。痴漢撃退用の護身術ですか？ ああそんな……いけませんいけません、何をしているんですかそれは……

「検査ですっ……！ ただの検査ですから……っ！」

こんな成りでも、貴女より、ひとふた回り年上のお爺ちゃんですよ？

いやまあ、気持ちは嬉しいけどね、多分。神奈さんも奥に隠れていただったので無問題。相変わらずどういいう状態なのか全然分からんけど。

「……そうでしたね。反射的に体が動いてしまいました。申し訳ありません」

「いえ……っ、こちらこそ一声掛けるべきでした……」

【公的機関の奥深く薄暗い密室に、白百合を思わせる可憐な美少女が強権力を持った成人男性と二人きり。男はその華奢な少女を度々呼び付けては、理路整然と『これは必要な事なのだ』と少女に言い聞かせ、その身を差し出すよう強要する。

『この男は世界の命運が委ねられている機関の重役だ。逆らえばどうなるか分からない』少女に冷たい緊張が走る。

もはや涙は枯れていた。少女はせめて自らの胸の痛み気付いてしまわぬようにと、静かに<sup>まがた</sup>瞼を下す。それがいつもの合図だった。閉ざしてしまえば口内を凌辱する何かの感触も、清廉な<sup>せいれん</sup>彼女の二つの恥丘をヌルヌルとした何かが無かる恥辱も、乱暴に貫かれた腹部の痛みもみんな見えない聞こえない感じない。だからきつと無かったことになる、そう己に言い聞かせる。

男は従順な少女の姿に喉を鳴らして純白の衣を奪い取った。赤い花卉には口を付け、甘やかな蜜を蓄えた秘唇<sup>ひしん</sup>に腰を弾ませ、少女の雪白<sup>せつぱく</sup>の柔肌をあらゆる手練手管を用いて汚し

てゆく――

今日も男の獣行と、少女の身体から鳴る湿った嬌声が蝉時雨に消える。

太陽に隠れるようにして行われる暗闇の宴は、今後も繰り返されてゆくのだろうか……】

【……】  
【……】

【……な……】

…なんてこと言うんですか氏紙さん!?!?!?」

私は何も言っていないさ、書いただけで。

そして誇張脚色曲解した狂言ではあっても虚言ではない。

虚言ではなく妄言である。

絵面が犯罪的すぎるんだよなあ…なんで女性神官同伴させてんのさ、ウケる。

「やましいことは何もしてませんよ!? 違います! 冤罪です!!」

「……現在は、見た目相応?の女子中学生として学生生活を送っていると伺っています。しかし、成人男性が突然少女の身に転じたことに、全く戸惑わないものなのではないでしょうか…?」

その神官はまるで、暴漢から子供を護る教師かのように私の前に凜と立ち、二階から目薬を差すが如く、ものすごく遠回しに『中身・内心の性は女性だった可能性』を指摘して技術主任に非難の目を浴びせる。

まあ、仮面で目は見えないし、私の内心の性は元から無いのだけれど。そろそろ主任さんが可哀想なので止めてさしあげるか……



「換装の件は承知しました…十日ほどお待ち下さい……」  
すまんかった。

まあしかし、さすがに出来合いのパーツは無かったようだ。  
それでも、たった一週間弱で用意できるというのだから彼らの優秀さが窺い知れる。

「二つ目の件は、私どもも初の試みとなりますのでお時間を頂戴いたします」

【何年掛かりますか？】

「そうですね……完全に独立させるのであれば一年以上、数年掛かるでしょうが、代行と  
いうだけであれば遠隔操縦を流用できますから、数カ月の調整で何とかしてみせましょ  
う」

形式を重んじる運営の神官たちは頭が固すぎて面倒だが、彼ら技術部は実に頼もしい。  
大本は私を持ち込んだ設計案図だが、それを基にこの義体を完成させたのは彼らの力だ。  
以来、定期的に運用データの提供他、数人とは個人的にも連絡を取り合っている。

……こんなことは昔の私なら行わなかったが、私の目のない所で行われる出来事や、隠  
されていることの情報収集。逆に、私が見付けた情報を人伝いに流して情報操作を行った  
り等には友好関係を築いていた方が都合がよいのだ。

親切風に振舞うのも同じことで、善意などではなくそれが合理的だから。

余裕があるなら極力親切にすべきだ、合理的に考えて。

余裕があるならできるだけ他人に優しくあるべきだ、合理的に考えて。

“挨拶は時の氏神” “情けは人の為ならず” である。

まあ他人なぞ、あまり当てにはできんが保険を掛けてリスクマネージメントである。

「……あなたはこの国を庇護しておられる神々も、我々人類も嫌っていると聞き及んでおります。 肉体を失い、自己の連続を断たれ、自身が本当に自分なのかも不確かな存在と成り、ついには関わりや命まで失いかけておられます。

多額の謝礼を受け取っているわけでもなければ、もし受け取ったとしても肉体が無ければ、うどんを食べる幸福も、女性を抱く喜びも得られない。財産を相続させる家族も居ない。日の温かさを感じることも、雨土の匂いを嗅ぐことも、新雪の冷たさも判らない。

何故これ程多くのものを失ってまで尽力して下さるのですか……?」

『何が目的だ』と訝いぶかしむように。何かを思い更よけるように、何故そんなにも自己犠牲的に振る舞えるのかと彼女に問われる。 ある意味、なぜ人は藻掻き苦しみながら生きるのかみたいな問いだ。 ……そうでもないか? まあ『野暮なことを聞くものだ』と私は思う。

しかし疑問も分かる。

彼ら要職と違って、私の月収12万ほっただからな。手取りで。

学生バイトかよ。クソ管理職共に対しては『祟り殺してやろうか』と常々思っている。給料上げろ。

特に今回は、私でなければ知り得ない情報だ。

適切で適当で対等な対価を支払え。

義体の支給で相殺とか舐めてんのかクソ。ぶち殺すぞ、人類。

……まあ、そもそも、『私は神を身に宿しており対話することができ。お前たちの未来も知っているぞ』などと自称する身元不明の何者かが突然現れ、勇者という世界の秘密に接触し、義体という兵器まで作らせたのだ。不審に思わない方がどうかしている。

解答はシンプルで難しいことは何もない。

【神殺しは生前からの野望でもありますし、今の私には戦争で死なせたくない人が居る。それだけです。大した意味はありません。】

「しかし、楓様がここに居られるというだけで、何もなさらずとも未来は保証されるのでありませんか？」

【たしかに未来は変わらないかもしれないし、変えられないかもしれない。

パラドクスを拒絶する世界の強制力によって、何もせずとも結果は変わらず勝利へ導かれるのかもしれない。

けれど、何もしないことで何かが変わってしまうかもしれない。

逆に、何かを行ったことで何かが変わってしまうかもしれない。

私の居た宇宙と、この宇宙は連続しておらず、並行する別の世界線なのかもしれない。

未来を経験していることと、未来予知の千里眼を持っていることは異なるので御座います。（経験した時点で経験者にとってその未来は既に過去の事象なのだから、主観的未来は確定していない）

世界の外から世界を観測し、観測した世界の縁からも独立し続ける完全な客観を持つ不可能存在ではないのだから、行い得ることは行うべきでしょう。】

「……そうですか」

「あなたは何を迷っておられるのですか？

どうせ神樹が作ったこの異界から現実に戻れば、この場の記憶は失われるのです。

お急ぎでなければ、どうかこの老僕の暇潰しにお聞かせ下さいませ。」

「……いえ、不躰な質問をしまい申し訳ありません。雑務が残っているので失礼い

たします」

『私は一人で大丈夫だ』というような何かを語ることも無く、ただ『何でもないので』と悩みを背負って立ち去る彼女を私は見送る。悩み迷い惑いながらも歩く彼女の背中、曲がることなく起立し、その意志の固さを物語っているようだ。なんて。

まあ、普通はそうだよな。

そう易々と他人に悩みひみっなど打ち明けないし語れない。

どうでもいい人間の悩みを自ら詮索するなんて私らしくもない。妙な気を起こしたものだ。

彼女たちの影響だろうか？

用事を済ませて外に出ると、男が鳥居を背に項垂れていた。

男はスマホと遠景を交互に見下ろしながら溜息を吐き、眉間をぐりぐりと指で解している。

「どうして、こうなってしまったんだ……」

何かを酷く後悔しているようだ。

まあ、どうでもいいことなので無視して帰る。

「…角？」

横を通って階段を下りる私の姿を捕らえたようだが、私には関係無いので振り返ったりはしない。

「待ってくれ……」

恐らく私に声を掛けているのだろうが、他の可能性もあるので無視して足を進める。

「……聞いてあげないの？」

神奈さんが小声で語り掛けてきたが関係無い。

責任を取れないことに対して、私は自ら首を突っ込むことはしない。

ましてや、赤の他人だ。 不用意に干渉すべきではない。

「待ってくれ……！　もしかして君は……」

肩を叩かれたので、仕方なく悩める人の子の姿を視認する。

寝付きが悪いのか血走った瞳の下には深いクマが出来ており、声は小さく震えている。

身なりは整っているのに、焦燥した大人の姿はみすばらしく思えて同情を誘う。　私は同

情では動かないが、乞われたならばそれを無碍にはしない。

仕方ない。　仕方がないので話を聞いてやろうと相對し、彼の口から発せられた言葉に

私は答えることができなかった。

\*

静聴してみたところ、話はこうだ。

彼の家は名家に連なる血筋で、その暮らしぶりは一般的な家庭から逸脱するほど豪華なものではなかったが、相続した家と安定した収入もあり、愛する妻と子供たちに囲まれた幸せな日々が続くと思っていた。

長女が神樹に見出された榮譽も受けて、益々もって未来への憂いなどなかった。

お役目の度に生傷を増やす娘のことは少々心配ではあったが、元々腕白で制服を泥まみれにしてくることもあったし、本人も気にしていなかったため、それが命に係わる危険な

お役目だという認識が欠けていた。

「大赦から説明されていたにもかかわらず、まさかまた小学校も卒業していない子供を死なせるような、そんなことはないだろうと……私が馬鹿だった……」

遠足から帰ってきた娘には腕が一本無かった」

娘は固く口を閉ざし、私たちが何度語り掛けても言葉を返してくれない。

抱きしめた身体は小さく、だらんとしていて、体温が失われたこの身体にはもう娘の魂が無いのだと理解した。

新聞を読む私の肩に跳び乗ってくることも、いつか彼氏を連れてくるかもしれないと身震いすることもできないのだと一挙に感情が押し寄せて、浅はかだった自身への怒りに身を焦がし、取り返しの付かない娘の未来に絶望した。大赦からは多額の資金援助と上級職のポストを約束されたが、そんなものの何の足しにもならない！……

「葬式以来、次男はずっと無気力で気晴らしをしようとする度に、世話好きだった姉を思い出して辛そうにしているんだ……妻の目は息子たちに娘の姿を重ねていて息子の姿を捕らえていない……まだ小さくて何も知らない三男の無邪気な声に心が擦り切れそうになる

…っ！ 私が娘を殺したようなものだ……

うちはもう駄目だけど、どうか君たちは……家族のためにも無理はしないでくれ……生きて帰って来てくれ……！ 私達には君たちが生きる世界が必要なんだ……！ どうか……

…どうかっ……」

階段を下りる彼の足取りは重く、不安定な精神に倣うように右へ左へと揺れていた。

時期と勇者というキーワードから察するに、彼は三ノ輪銀の父親なのだろう。

この異界でなら会わせることができるが、果たしてそれは双方にとって救いになるだろうか？ 死んだはずの愛娘の姿は彼らにとって後悔と未練の結晶となる。

場合によっては、拗れるだけ拗れて娘の心に傷を負わせるだけで終わるだろう。他人が気休めを吐いたところで逆効果だし、健全な家庭というものが分からない私には判断できないことだった。